

所属学部：国際文化学部

学籍番号：17G1226

氏名：松田三奈

指導教員：鈴木 靖

2020 年度法政大学国際文化学部卒業論文

# 朝鮮半島分断と観光化

～38 度線が問いかけるもの～

法政大学国際文化学部

17G1226 松田三奈

# 目次

第一章 序論.....	2
第二章 日本の植民地時代における南北分断と朝鮮戦争 .....	4
第三章 観光化の始まり.....	6
第一節 安保観光と平和教育.....	6
第二節 幻の金剛山観光.....	7
第四章 DMZ（非武装地帯）ツアー.....	9
第五章 韓国と北朝鮮の「今」 .....	16
第六章 韓国と北朝鮮の「これから」 .....	18
参考文献.....	20

## 第一章 序論

朝鮮半島。そこには現在、韓国・北朝鮮という2つの国がある。私たちが気軽に旅行に行けて、若者を中心に文化的交流が多い韓国と、いまだほとんどの人がニュースを通してしか知らない北朝鮮。同じ言語を話し、同じ民族が暮らす2つの国の間には「38度線」という境界線が存在する。そして韓国・北朝鮮両国でこのラインを「38度線(サンパルソン)」と呼ぶがそこには歴史への恨みと民族の深い悲しみが込められている。

1945年、ポツダム宣言受諾により第二次世界大戦が終わり、朝鮮半島は35年に及ぶ日本の植民地支配から「解放」されたが、朝鮮半島の中央部にある38度線から南側が米国、北側がソ連が軍政を敷いた。朝鮮民族にとって植民地支配からの「解放」が「分断」という悲劇のスタートとなったのである。だが、当時38度線は地図上に描かれたもので、特別な障害があったわけではなく、そこまで厳しく統制されたものではなかったという<sup>1</sup>。つまり、それぞれの国が南北両政府の管理下に置かれていたものの、国家の分断以前は大部分が民間人によって所有されていたということである。そこでこの状況を大きく変えたのが1950年6月25日未明、北朝鮮軍が38度線を越えて南に侵攻したことにより、勃発した朝鮮戦争である。同じ民族が国家の存亡かけて全面戦争を行い、実際に戦った軍人だけでなく、民間人の被害も甚大であった。

この38度線一帯の地域が非武装地帯(DMZ)である。DMZとはDeMilitarized Zoneの略称で、朝鮮戦争の休戦時に定められた休戦ライン(北緯38度線)の南北2km内のエリアでありその名の通り「軍事活動が許されない地域」のことである。つまり最も安全な地域でなければいけない。しかし、この非武装地帯の中で銃撃戦や海上の軍事境界線周辺での交戦は時折起こっている。最も有名な事件で「ポプラ事件」がある。これは1976年8月18日午後、韓国と北朝鮮の共同区域内に埋められていたポプラの木を剪定しようとしていた韓国人労務者に北朝鮮兵士らが近づき、剪定の中断を求めると口論となり、その場にいた米軍将校2人が北朝鮮兵士らに殺害された事件だ。韓国では「8.18斧殺害事件」、北朝鮮では「板門店事件」とも呼ばれている。そして記憶の中で一番新しい事件は以下の事件だ。2017年、11月13日午後3時15分ごろ、一人の北朝鮮兵士が板門店の南北境界線を突破して、韓国に亡命した。北朝鮮軍は亡命した兵士に40発以上の銃を浴びせ、そのうちの5発が命中。兵士は一命をとりとめたがこの40発以上もの発砲が、殺害してでも亡命を阻止しようとしたことが北朝鮮軍からうかがえる。公開されたこの事件当時の映像からは私たちが今までに感じたことのない緊張感が漂っており、38度線一帯がどれほど厳しい場所であるかを再び考えさせられるような衝撃的なものであった。

私たち日本人にとって同じ民族が互いに銃を向け合うといった状況は想像もつかないが、韓国と北

---

<sup>1</sup> 崔吉城「朝鮮半島の南北分断と『敵対双方』の観光化<論説>」(アジア社会文化研究会 第一号、2000年、p.2)

朝鮮は戦後 70 年以上この「分断」という状況が続いてきた。

韓国ではこういった南北の分断を題材にした映画が数多く存在する。中でも韓国で大ヒットした代表的な映画に『JSA（原題：공동경비구역 JSA）』がある。この映画は非武装地帯をパトロール中に共に勤務していた部隊と離れ、地雷を踏んでしまった韓国軍兵士を北朝鮮兵士が助け、そこから始まる二人の交流と破局を描いた物語である。南北の緊張が溢れる最前線で信じがたいストーリーであるが、1998 年に同じような事件が発覚し注目を集めた。この結末は、南北の兵士たちが交歓中に北の見回り兵が哨所に訪れ秘密が発覚し、撃ち合いの末に破局を迎えることになる。この映画は南北の融和の流れに厳しい対時の現実があるということを読み知らされるような物語である。また、最近では韓国のロマンスドラマ『愛の不時着』が日本で大きな話題となった。パラグライダー中に思わぬ事故に巻き込まれ、非武装地帯（DMZ）を越境して北朝鮮に不時着してしまった韓国財閥令嬢が、そこで出会った堅物の北朝鮮将校に助けられ恋に落ちていくドラマである。実際に北朝鮮でこのような出来事が起きた場合、密入国した人間が軍部に見つかったら命の保証はなく、またそれをかくまった人間も命はないと言われている。このドラマではそのようなシビアな韓国と北朝鮮の複雑な関係がリアルに描かれつつ、その一方で現実では考えられないような幻想的な内容も含まれている。こういった映画やドラマの中で描かれているものには、現実とは裏腹に南と北の「友情」や「平和」を描いた作品が多い。

これらの作品には分断を象徴する建物や場所がいくつか登場する。例えば、南北首脳会談が行われた板門店、非武装地帯（DMZ）、朝鮮半島北部にある金剛山、そして『JSA』の舞台にもなった「帰らざる橋」<sup>2</sup>などがある。現在は、このような様々な歴史を物語る歴史的緊張の場が、「観光商品」として使われるようになり、世界から多くの人々が訪れ、その価値を高めている。軍事や政治などで問題が起こっていながらも、韓国、北朝鮮双方が同じ民族の「平和」そして「統一」を象徴する場として、政策に利用しているのだ。

本稿では、民族分断という特殊な関係を有する朝鮮半島において存在する 38 度線付近が、現在観光地してどのような役割を果たしているのか。「観光化」は一体どのように始まったのか、また自身が参加した経験をもとに「DMZ（非武装地帯）ツアー」が具体的にどのような内容のツアーなのかを紹介し、分断から観光化の現在に至るまでの南北の歩みを辿る。そして最後にこれらのことを踏まえ、この二つの国がこれからどのような関係へと発展していくのかを論じる。

---

<sup>2</sup> 韓国と北朝鮮の軍事境界線を通る沙川江に架かる橋。この橋の本名は沙川橋だが朝鮮戦争休戦後、この橋で捕虜交換が行われ南北どちらかを選択すると二度と逆方向には戻れないことから、こう呼ばれるようになった。

## 第二章 日本の植民地時代における南北分断と朝鮮戦争

朝鮮戦争を題材にした映画に『ブラザーフード（原題：태극기 휘날리며）』がある。この映画は朝鮮戦争によって引き裂かれた兄弟と、同じ民族でありながら戦わざるを得なかった状況下での人々の怒りや苦しみ、そして悲しみが描かれている映画で、韓国では大ヒットを記録した。この映画の中で軍や民間の反共組織が「赤狩り」をする場面がある。「赤狩り」とは共産主義者（「北朝鮮＝赤」を支持する者）であるとのレッテルを貼り、政府が逮捕したり追放したりする行為である。朝鮮戦争では軍や民間の反共組織による大量虐殺も行われていた。

敵か味方か区別が難しい同じ民族、そして本来区別する必要のなかった民族が命を懸けて戦う。そんな時代が朝鮮半島にあったということ、そして未だこの2つの国が休戦状態であることを私たちは忘れてはいけない。

1948年に大韓民国、翌9月に朝鮮民主主義人民共和国が建国され、そこで朝鮮半島に「国境」が形成された。しかし、序論でも述べたように朝鮮戦争が起こるまでは南北双方とも、これが永続的なものであるといった認識はなかった。李承晩大統領は、「北進統一」を掲げ、北朝鮮の金日成も「米帝の傀儡政権」である李承晩政権からの「南朝鮮の解放」という目標を放棄していなかったのである。<sup>3</sup>

両国の意にそぐわぬまま始まった朝鮮戦争だが、当初その原因には様々な解釈があった。スターリンの指示を受けた金日成による対南侵略戦争であり、朝鮮半島全体共産化統一しようという試みであったとする一方で、資本主義である米国側が北朝鮮の「南侵」を誘導したといった解釈が提示された。ここまでの解釈は私たち日本人の想定範囲内にあるだろう。だが、このように様々な解釈が挙げられていた中で、朝鮮戦争を1950年6月25日以降に限定するのではなく、それ以前に遡らなければいけないといった解釈が挙げられた。それは「日本の植民地時代におけるもの」である。この内容は、朝鮮戦争は日本の植民地時代からすでに存在していた南北対立を米ソ冷戦が増幅させたものであり、それが南北分断に至ったといったものである。<sup>4</sup>つまり朝鮮戦争勃発の根本的な「原因」は日本植民地支配時代にあり、朝鮮半島の勃発、そして南北分断は日本が深くかかわっていたということである。

元朝日新聞ソウル局長である小田川興氏は自身の著書の中で、民族分断の歴史的原因を作ったのは日本による朝鮮半島の植民地支配であったとし、朝鮮戦争で引かれたとされる38度線を「軍国日本の置き土産」といった表現をしている。なぜ小田川興氏はこのような表現をしたのか。「置き土産」の意味はプラス・マイナスどちらの意味にも使われるが、小田川氏が述べたこの「置き土産」

---

<sup>3</sup> 木村正史『国際政治のなかの韓国現代史』（山川出版社 2012年）p.24

<sup>4</sup> こうした修正主義史観に基づく新たな朝鮮戦争研究の可能性を切り開いたのはカミングスである。[カミングス,1989] [カミングス,1991]

はマイナスの意味からくる。それは「日本政府の無責任さ」である。日本は打ち負かされた状態で連合国に降伏勧告をされていたが、その勧告を無視し、ポツダム宣言の受諾を遅らせた。その結果米国による広島と長崎への原子爆弾投下、そしてソ連の参戦を招いた。これにより日本国民は大きな犠牲をしいられることになり、また朝鮮半島の人々はソ連が参戦したことにより、後に米ソによる祖国分断（朝鮮戦争）という悲劇を現在までも引きずることになってしまった。<sup>5</sup>当時日本政府は国の利益を優先させ、国民の犠牲は気にも留めなかった。ましてや植民地にした隣国の民（当時の朝鮮半島の人々）のことは念頭にも置いていなかったという。

また歴史学者である水野直樹氏は「南北の分断について日本が大きな責任を負っていることを忘れることはできない」とし「まことに初歩的な事柄だが、そもそも日本の植民地支配がなかったら朝鮮半島への米ソ両軍の進駐もなく南北分断も生じなかった」と日本の植民地支配が朝鮮半島分断の大きな原因になったことを訴える。<sup>6</sup>私はこの論文を作成するにあたってこのような認識があるということを初めて知った。だが韓国ではこの認識がすでに存在しており、韓国人が分断の原因と統一への道を探る時に日本の植民地支配の時代まで遡ってその問題を追及しているのである。<sup>7</sup>これは韓国人と日本人の認識の大きな違いといえるだろう。朝鮮半島の人たちが南北分断の苦痛を感じる時、「日本の植民地がなかったら、解放後の米ソによる分断はなかった」と考える人もいるということ日本人である私たちは知っておくべきである。

朝鮮戦争による犠牲者数は資料により大きく異なるが、過去に起こった戦争と比較しても民間人の犠牲者数は膨大であり、表1を見ればいかに悲惨な戦争であったかがわかる。また、この戦争により約1000万人ともいわれる離散家族を生み出してしまったことは休戦後である現在までも癒えない傷として残っている。

表 1

韓国側		北朝鮮側	
韓国軍	61~99 万人	北朝鮮軍	61~92 万人
韓国民間	84~99 万人	北朝鮮民間	150~268 万人
国連軍	約 8 万人 (内約 4 万人が米軍)	中国軍	18~36 万人
		中国民間	72 万人 (人民志願軍として参加)

[出典] TRANSIT42 号 「韓国・北朝鮮 近くて遠い国へ」(講談社 2018 年)

<sup>5</sup> 小田川興『38度線・非武装地帯を歩く』(高文研 2008 年)

<sup>6</sup> 水野直樹 『姜萬吉の歴史学について』(季刊三千里第 43 号 1985 年 8 月号)

<sup>7</sup> 高吉嬉「朝鮮半島の分断と統一問題をめぐる日韓相互認識の隔たり：日韓の教育的地平の統一のための基礎作業」(東京大学大学院教育学研究科紀要 第 37 巻 1997 年 12 月)

## 第三章 観光化の始まり

### 第一節 安保観光と平和教育

韓国政府は、DMZ を観光資源として 1960 年代以降の板門店観光を嚆矢として利用しはじめ、その後 1980 年代後半から本格的に開発に乗り出した。<sup>8</sup>この観光化の開発に乗り出した目的とは一体何だろうか。それは主に 2 つ挙げられる。

一つ目の目的として考えられるのは「平和教育」である。南北分断という特殊な環境を持つ朝鮮半島は、歴史的苦痛と政治・社会構造における矛盾と困難を抱えており、そのことが様々な非平和的現象を生み出している。その問題を解決するために実践的な教育活動として韓国では「平和教育」を行っている。ではこの「平和教育」とは一体どのような教育なのだろうか。韓国国内で最大手のインターネット検索ポータルサイト「NAVER」では「平和教育」の定義として、「互いに異なる国民間の相互理解を深め、世界の平和を維持することに寄与することを目的とする教育活動」と記されている。また、様々な韓国の学者たちがこの「平和教育」について定義づけをしているが、中でもカン・スンウォンは「平和教育とは、物理的、構造的、文化的暴力を誘導する行動や態度、知識を磨かないようにするための社会変革的な心構え、態度、そして知識を育てる統合的教育で、認知的領域と定義的領域、活動的領域を包括する総合的な教育課程を意味する」と論じている<sup>9</sup>。

特に、「平和教育」の中でも朝鮮半島の南北分断状況は、何よりも非平和・暴力を惹起させる要因であると考えられる。そのため韓国政府が行っている「安保観光」<sup>10</sup>は「平和教育」の一環として行っているといえるであろう。つまり、DMZ 観光によって現在の民族分断の状況を韓国国民に公開することで安保に対する意識、そして平和に対する意識を高めさせるのである。実際に平和教育の研究が本格化したのは 1980 年後半から<sup>11</sup>であり、この年はちょうど韓国政府が軍事境界線付近の観光化に乗り出し始めた頃である。

二つ目の目的として考えられるのは敵対関係からくる緊張を商品化した外国人向けの観光である。外国人観光客からの観光収入利益が韓国に経済的効果を生む。今まで経験したことのない分断国家という状況を肌で感じるこのツアーは外国人観光客にとって物珍しく非日常的な空間を楽しむことができる場所であるといえるだろう。

この場所の主な観光内容は板門店観光、DMZ 観光や北朝鮮が韓国に侵入するために掘られたとされる地下トンネルツアーである。最近では「脱北者と行くワンコリアツアー」といい、脱北者と

---

<sup>8</sup> 李良姫・福原裕二「韓国における民族分断と観光」(北東アジア研究 第 17 号 2009 年 3 月 p131)

<sup>9</sup> カン・スンウォン「同年代の仲裁 (原題: 또래중재)」(コミュニティ 2007 年 5 月 pp.16-17)

<sup>10</sup> 韓国では朝鮮戦争に関する史跡や施設、民族分断の状況を利用した観光を「安保観光」と言われている。「統一観光」「統一安保観光」とも呼ばれる。

<sup>11</sup> 金恵玉「韓国における平和教育と現状と課題」(立命館産業課題論集 第 44 巻 第 4 号 2009 年 3 月)

共に DMZ ツアーに参加し、北朝鮮での生活の実情を直接聞くことができるツアーもある。

表 I は 1999 年から 2001 年の韓国人と外国人の安保観光地観光客動向である。観光資源として機能し始めた頃は「平和教育」の影響からかほとんどの観光地が外国人よりも韓国人が多いことがわかる。しかし、現在はほとんどの観光客が外国人である。

表 2 安保観光地観光客動向 (1999~2001)

年代	1999			2000			2001		
	小計	韓国人	外国人	小計	韓国人	外国人	小計	韓国人	外国人
計	1,921,991	1,448,022	473,969	1,922,911	1,590,305	332,606	1,132,331	913,026	219,305
板門店	104,482	46,732	60,150	104,441	43,501	60,540	120,000	57,000	63,000
南侵用地下トンネル 2 号	254,292	253,500	792	281,977	271,966	9,981	176,935	137,963	38,972
南侵用地下トンネル 3 号	291,659	261,157	30,502	284,145	233,623	50,522	240,591	192,219	48,372
南侵用地下トンネル 4 号	186,305	185,856	449	155,535	155,535	191	126,083	125,762	321
統一展望台(オドウサン)	791,104	439,620	351,484	812,907	652,057	160,850	258,131	207,863	20,268
都羅展望台(トラ)	291,659	261,157	30,542	284,145	233,623	50,522	240,591	192,219	48,372

[出典]李良姫「民族分断と観光 金剛山観光から見る韓国・北朝鮮関係」

## 第二節 幻の金剛山観光

標高 1,638m で朝鮮民族にとって最も誇るべき名山である金剛山。この山は江原道に位置しており、古来朝鮮半島では白頭山と並ぶ名山とされ、数多くの詩や紀行文などで景勝地として称賛されてきた。私が韓国語を学び始めて最初に学んだことわざが「金剛山も食後の景色 (금강산도 식후경)」である。これは「どんなに美しい景色も、腹を満たしてから見に行こう」という意味があり、日本のことわざにある「花より団子」と似た意味を持っている。

戦後、38 度線の北に位置するようになった金剛山は観光資源として日本植民地時代から開発が行われ、1998 年には韓国・現代グループが「特別経済地区」として長期の独占的な開発・利用券を獲得した。したがってそれまで立ち入ることの出来なかった韓国人も観光が許されるようになり、2000 年には日本人を含む外国人にも開放された。このことは韓国人が直接的に北朝鮮を観光できる歴史的瞬間となり、韓国と北朝鮮の関係に大きな意味を持つ出来事であっただろう。実際にこの金剛山観光の開放を皮切りに、2000 年 6 月に韓国の金大中大統領と北朝鮮の金正日国防委員長が史上初の南北首脳会談を平壤で開催し、平和統一に向けて努力することをうたった南北共同宣言が合意された。さらに離散家族再会や様々な分野での民間交流が実行された。その後も盧武鉉大統領が平



和繁栄政策を掲げ、平和を定着させ経済的に共同の利益を実現する方向で対北朝鮮政策を構想した。

しかし、この後ある事件がきっかけで金剛山観光が全面的に中止されることになった。それは、「金剛山射殺事件」である。2008年7月11日、金剛山を観光していた韓国人女性が北朝鮮兵士に銃で撃たれ死亡した。北朝鮮側は女性が軍事境界線地域に侵入し、警告を聞かなかったため発砲したと主張しているが、そのいくつかの証言の中に疑問点があり、韓国側が現場での調査申し入れをしたが北朝鮮側が拒否したため未だ真相は明らかになっていない。

この事件をきっかけに再び南北関係が冷却し始めた。2009年3月に哨戒艦沈没事件<sup>12</sup>が発生し、韓国政府は北朝鮮の攻撃による沈没であると断定した。その影響で開城工業団地を除く南北経済協力と人的交流を停止する五・二四制裁措置を下した。当時政権を担っていた李明博大統領は、南北平和を良好に進めていた盧武鉉政権とは打って変わり、北朝鮮との関係を悪化させたまま任期を終えた。

このように金剛山観光の開放は良くも悪くも韓国と北朝鮮の関係を大きく変えた出来事であった。

---

<sup>12</sup> 黄海にある島の南西沖合 2.5 キロで、韓国哨戒艦「天安（チョンアン）」が沈没し、46 人の海軍兵士が死亡した事件。

## 第四章 DMZ（非武装地帯）ツアー

この章では、私が実際に参加した「DMZ（非武装地帯）ツアー」が具体的にどんな内容であったのかを詳しく紹介していきたい。ツアーの内容については観光会社によって多少異なるが私が参加したツアー内容は以下のとおりである。

「臨津閣（イムジンカク）公園」 → 「自由の橋」 → 「統一大橋検問」 → 「南侵第三トンネル（DMZ 映像館、展示館）」 → 都羅山（トラサン）駅 → 「都羅（トラ）展望台」【※悪天候だったため「烏頭山（オドゥサン）統一展望台」に変更された】 → 「臨津閣（イムジンカク）公園」

私が参加したこのツアーでは、宿泊したホテルまでツアー会社が車で迎えに来てくれたが、その時すでに違うホテルでピックアップされた日本人観光客が一組、外国人観光客が一組車に乗っていた。ツアーガイドは 30 代前半くらいの韓国人男性と中年の韓国人女性で、男性は英語、女性は日本語が堪能であった。現地に到着するまでの道のりで「どこから来たのか」「なぜこのツアーに参加しようと思ったのか」といった簡単な質問をされた。

現地に到着し、最初に訪れたのは「臨津閣（イムジンカク）公園」である。ここは軍事境界線からわずか 7km の場所にある平和祈念公園で、平和の大切さと統一の重要性を知らせるために造成されたという。約 3 万 6000 坪の規模を誇り、敷地内には南北の平和を象徴する記念碑や建造物、当時の激戦跡が残っている。そして北朝鮮に近い場所で民間人が自由に行き来できる唯一の場所である。ここでは数多くの展示品があったがその中でも印象深かったものを紹介していきたい。

車から降りて最初に目にしたのは「平和の鐘」（図 1）であった。「平和の鐘」は 21 トン・21 階段・21 坪の敷地に建造された鐘閣で、この鐘の手前には石碑（図 2）があり、韓国語と英語で以下のことが記されていた。



図 1 平和の鐘



図 2 平和の鐘 石碑

南北分断の 20 世期を終え、新たな 21 世期を迎えながら民族の和合と祖国統一、そして人類平和のために分断の地この場所で 900 万の京畿道民の意思と真心を集めて「平和の鐘」を建立した。「平和の鐘」は私たちの国の固有の様式で重さ 21 トン、直径 2.23m、高さ 3.80m の規模である。

そしてこの「平和の鐘」からまた少し先に行くと北朝鮮記念館、向かい側には望拝壇(マンペダン)という石碑が立っている。望拝壇(マンペダン)は離散家族の断腸の念と統一への願いが込められた常設祭壇で毎年、旧正月(ソルラル)と旧盆(チュソク)に北の故郷を離れた人々(離散家族)が祭祀を行うところだという。(図 3)



図 3 望拝壇(マンペダン)

次に訪れたのが「自由の橋」(図 4)。停戦後一万人以上の捕虜たちが北朝鮮から帰還する際に「自由万歳」と叫びながら帰還したことから「自由の橋」と命名された。橋の先には、南北統一の思いを記した横断幕や断ち切られた家族へのメッセージが書かれた平和のリボンで埋め尽くされていた。その中に書かれていたいくつかのメッセージの中には「いつか会える日を願っています」「お兄さん、お姉さん。元気ですか?会いたいです」「私たちは統一を望みます」といったことが書かれていた。一つ一つの文字からは離散家族の切なる願いが伝わってきて、胸を締め付けられるような感情になったことを今でも鮮明に覚えている。



図 4 自由の橋 1



図 5 自由の橋 2

この自由の橋の近くには、朝鮮戦争中に北朝鮮軍から攻撃を受けた蒸気機関車がある。(図5) この蒸気機関車は半世紀に渡って非武装地帯に放置されていた。2004年、辛い歴史の象徴するものとして文化財に登録され、臨津閣で保存し展示されるようになった。当時の機関士の証言によれば、軍事物資の輸送中に攻撃を受けたとされ、実際この機関車には約1020発にも及ぶ銃弾の痕が残っている。この蒸気機関車を見ていると当時の凄まじい状況が生々しく伝わってきた。



図5 銃弾を受けた蒸気機関



図6 臨津閣の駅を示す看板

この「臨津閣（イムジンカク）公園」までは民間人も気軽に足を踏み入れることができる場所であったが、この先はさらに北に近づくため個人乗用車では進むことができず、他の観光客と共にバスに乗り換えた。バスで先に進むと「統一大橋」というところで検問が行われた。ここからは少し張り詰めた空気になり、橋の中間地点で待機していた軍人がバスの中に乗り込み、パスポートチェックが始まった。それまでは自由に撮影することが可能であったが、ツアーガイドからバスの中は撮影が禁止されていること、そしてこれから先は撮影できる場所が限られているため注意を払うようにと教えられた。

検問が終わり、次に訪れたのは「DMZ映像館」そして「南侵第3トンネル」である。実はここは私が一番期待していた場所であった。今までは歴史的な建造物や当時の激戦跡を見るだけであったが、「南侵第3トンネル」では実際にその空間に入り、韓国と北朝鮮の狭間を肌で感じる事が出来る場所であるからだ。

このトンネルはかつて北朝鮮が韓国を攻め入るためにソウルに向けて極秘で掘ったトンネルである。しかし、発見された当初北朝鮮側は韓国側が自ら掘ったものだと主張したという。

現時点で4つのトンネルが発見されているが（ある脱北者の証言によればトンネルは20数カ所あるらしいが、その後は発見されていない）、第3トンネルは1978年10月17日に国軍（韓国軍）によってソウルからはわずか40キロの在韓国連軍管轄区域で発見され、第1、2トンネルよりも遥かに驚異的なものであったとされている。（表3）

表 3 DMZ 周辺で発見されたトンネル

	第 1 トンネル	第 2 トンネル
発見時期	1974.11.5	1975.3.15
構造	コンクリート	自然岩盤掘削（アーチ型）
位置	高浪浦北東 8 キロ	鉄原北方 13 キロ
大きさ	幅 90 釐、高さ 2 釐	2.2 釐、2 釐
深さ	地下 450 釐	地下 50～100 釐
長さ	3500 釐	3500 釐
浸透距離	1000 釐	1100 釐
予想奇襲方向	高浪浦・議政府・ソウル	鉄原・抱川・ソウル
戦術能力	一個連隊浸透可能	一時間で大規模兵力と野砲など重火器通過可能 複数の出口を作り有事にはいくつもの地域に浸透
特徴	運搬車両使用、排水路、電気施設	
	第 3 トンネル	第 4 トンネル
発見時期	1978.10.17	1990. 3.3
構造	第 2 と同じ	第 2、第 3 と同じ
位置	板門店南方 4 キロ	江原道楊口北東 26 キロ
大きさ	2 釐、2 釐	1.7 釐、1.7 釐
深さ	地下 73 釐	地下 145 釐
長さ	1635 釐	2052 釐
浸透距離	435 釐	1028 釐
予想奇襲方向	汶山・ソウル	ソファ・ウォンドン・嶺東高速道路
戦術能力	第 2 と同じ	第 2、第 3 と同じ
特徴	第 2 と同じ	第 2、第 3 と同じ

[出典]小田川 興『38 度線・非武装地帯を歩く』（高文研 2008 年）

このトンネルに入る前に DMZ 映像館に案内された。図 7 の写真は DMZ 映像館の前にある記念碑であり、分断された 2 つの国（球の片側は韓国、もう一方は北朝鮮を表している）を両国民の手で統一しようという願いが込められている。

DMZ 映像館の中に入ると DMZ 周辺を巡回する韓国人兵士の模型や板門店周辺の建物の模型、朝鮮戦争で実際に使われていた銃などが展示されていた。ここでもツアーガイドが一つ一つ展示品を詳しく説明してくれた。ここで最も興味深かったのは、韓国側はなぜ北朝鮮側がトンネルを掘っていることを明らかにできたのか、そしてそのトンネルの場所をどのように見つけることができたのかである。ツアーガイドの話によると、北朝鮮の亡命者が、韓国軍に「北でトンネルの測量に従事した」といった証言をしたことがきっかけで第三トンネルの存在が明らかになったという。そしてこの亡命者の話をもとに DMZ 付近の地面に等間隔で長い筒状の棒を立

て、その筒の中に水を満杯に入れ、捜査を行った（北朝鮮軍はダイナマイトを爆破することでトンネルを掘っているため、爆破が行われた時に満杯に入れた水が振動で上に跳ね上がり水がこぼれる）。しかし、最初の1, 2年は何の変化もなく亡命者の証言は嘘であったとされた。ところが、1978年になって筒状の棒から水が噴き出し、その地点を掘り進めていったところトンネルが見つかったという。私はこの話を聞き、恐ろしさと共にそのトンネルを探す手段に感心した。

一通り展示品を見た後にDMZに関する映像を観て、第三トンネルに向かった。図8の写真は第三トンネルに向かう入り口の写真である。



図7 南北の統一を表す記念碑



図8 DMZ 観光案内所 / 徒歩観覧路

中での撮影は禁止されていたためトンネルの写真は撮ることができなかったが、まず中に入るとロッカーにすべての荷物を預け、用意されたヘルメットをかぶりトンネルの中へと進んでいく。第3トンネルは全長1,635m、地下73m地点に位置しており、高さ2m、幅2mのアーチ型トンネル。軍事境界線まで1200m、軍事境界線からは南の方に435mを掘り進めたところ、韓国軍の貫通位置から発見された。現在はトンネル内の265m北まで徒歩で見学することができ、その先は遮断壁が設置されている。<sup>13</sup>

トンネルに到達するまでは15分ほどかかるが坂道になっているため、休憩できるベンチが等間隔で置かれていた。中は薄暗く、空気がひんやりとしていた。トンネルに到達すると所々天井が低く、低姿勢で前に進んでいった。トンネルの壁には北朝鮮側がトンネルを掘り進めていくために使用したと言われているダイナマイトの跡が生々しく残っており、当時この場所でダイナマイトが使われていたと考えると、恐ろしさのあまり鳥肌がたった。これを掘るために北朝鮮の多くの兵士たちが命を懸け、その作業中に亡くなった人も少なくないという。トンネルを進んでいくと事前に説明を受けていた遮断壁が見えたため私たちが立ち入れる範囲に達したことがわかった。遮断壁付近には監視カメラが付いていた。そしてその隙間からはトンネルが続いている様子が薄暗く見えた。ここを突き進んでいけばあの北朝鮮と繋がっていると考えると今までに感じたことのなかった緊張が走った。

次に訪れたのは、都羅山（トラサン）駅だ。この駅は韓国最北端の駅で今後南北の鉄道が連結すれ

<sup>13</sup> 第三トンネル模型石碑より

ば、隣の駅は北朝鮮国内にある開成（ケソン）駅であり、ここが北朝鮮に向かう始発駅となる。都羅山駅は韓国内外で南北統一を念願し、世界平和を祈願する場所として知られ、ここで多くの平和行事が開催された。そして2002年に金大中大統領とアメリカのブッシュ大統領が共に訪問したのを皮切りに韓国内外から毎年数十万名あまりの観光客がここを訪れている。<sup>14</sup>

図9の写真が都羅山駅である。正面には「都羅山駅」そして横には「京義線鉄道南北出入事務所」という文字が書かれており、外観はとても立派な造りであった。



図9 都羅山（トラサン）駅



図10 都羅山（トラサン）駅構内

中に入ると、ほとんどがガラス張りであったため開放感があり、駅というよりは空港の国際線ターミナルのような感じがした。開城駅に向かって一度も出発することがないまま綺麗に残っているホームや出国手続きブース、そして「平壤（北朝鮮の首都）方面乗り場」と書かれた看板からは今にも駅としての機能を果たしそうな錯覚に陥るほどであった。しかし、駅周辺や駅の中は外国人観光客がひたすら写真を撮る姿しかなく、静かであったため設備が十分に揃っているのにも関わらず、どこか物足りなさを感じた。図10の写真が駅の中の一部である。時刻を表す電光掲示板には「これから韓国鉄道（TKR）がシベリア鉄道（TSR）、中国鉄道（TKR）と連結する日、都羅山駅は大陸に向けた出発点として再び、その意味を与えられることとなります」と書かれている。そして同じ写真の中には南北鉄道締結後のユーラシア大陸横断鉄道の路線図がある。統一後はヨーロッパまで一本の線路で結ばれることになるという。この駅が動き始める日は果たしていつになるのだろうか。

最後に訪れたのは、「烏頭山（オドゥサン）統一展望台」だ。当初の予定では、「都羅（トラ）展望台」であったがこの日の韓国は雪の影響により空が曇っており、景色が全く見えない状態であったため急遽比較的景色が見やすいという「烏頭山（オドゥサン）統一展望台」に変更になった。烏頭山（オドゥサン）統一展望台は漢江と臨津江が合流する自由路沿いに位置しており、北朝鮮（展望台からの直線距離約460m）が一望できる場所で失郷民には故郷に対する懐かしさを慰めることができる場所だ。盧泰愚大統領の「平和市構想」によって1992年9月に開館し、分断の現場を実際に見て北朝鮮住民の生活像を感じることができる統一教育の場で、外国人がよく訪れる国際的な統一・安保観光地で

<sup>14</sup> 駅舎前都羅山駅解説看板より

ある。<sup>15</sup>

展望台に着くと、情報番組でよく目にしていた北朝鮮という国を初めて目の当たりにした。生まれて初めて目にするその光景に驚きを隠せなかった。この日は天候によりはっきりと見ることはできなかったが、所々にコンクリートでできたアパートのような建物が並んでいるのが見えた。しかし、そこに人が住んでいるようには見えなかった。すると、ここでツアーガイドが興味深い話を聞かせてくれた。今立っている展望台から見えるものはすべて北朝鮮の「宣伝村」であり、学校や病院などに見せかけている「ダミー村」だという。そのため実際にその建物の中に人が住んでいるわけではなく、北朝鮮という国が繁栄しているかのように見せているだけだという。ここまで精細に考えられている様子を見ると北朝鮮という国が改めて未知な国であることを実感した。

今回の DMZ ツアーの中に板門店観光は含まれていなかったため訪れることはできなかったが、DMZ ツアーでこの緊迫感であれば、その先にある板門店はそれ以上の緊迫感が漂っているに違いないだろう。私はこの DMZ 観光で朝鮮戦争から現在へと続く韓国と北朝鮮の緊迫感を肌で感じたその日から、これまで以上に南と北が平和的に戦争を終えることを強く願うようになった。

---

<sup>15</sup> オドウサン統一展望台館内パンフレット



## 第五章 韓国と北朝鮮の「今」

この章では両国の「今」を見ていきたい。まず、朝鮮半島南部に位置する大韓民国。略称は韓国。英語表記では Republic of Korea が正式だが、北朝鮮の North に対して South Korea との略称で表記されることも多い。韓国は日本の若者が今最も親しみのある国と言ってもいいのではないだろうか。ここ最近のトレンドは原宿ではなく、新大久保と言われるほど、韓国文化の人気の若者の中で高まっている。政治的な面では日韓関係が悪化する一方で、文化的交流は現在も頻繁に行われている。ペ・ヨンジュンが主演の『冬のソナタ』を火付け役として韓流ドラマが話題となった第1次韓流ブーム、少女時代や KARA、東方神起などの K-POP スターが人気を集めた第2次韓流ブームに続き、現在の第3から第4次韓流ブームが起こっているといわれている。

朝鮮戦争で大きなダメージを受けた韓国は、1960年代前半まで最貧国の一つともいわれていた。しかし、精密機器の開発を始め、IT業界などで国際的な企業が誕生し、2017年にはGDP世界12位の経済大国へと成長を遂げた。韓国経済の革新的な第一歩と言え、1960年代後半からの「漢江の奇跡」<sup>16</sup>である。そして、それにより海外からの投資や技術提携などもありながら「10大財閥」<sup>17</sup>が誕生する。これらの財閥は様々なジャンルを牽引し、韓国の復興と成長に大きく貢献した。

次に、朝鮮半島北部に位置する北朝鮮。正式な国名は、朝鮮民主主義人民共和国。正式な英語表記は Democratic People's Republic of Korea (DPRK) だが、一般的に North Korea と称している。民主主義を自称し、社会主義思想をベースとした主体思想という独自のイデオロギーによって国家が成り立っているとしている。一党独裁制を敷いており朝鮮労働党は内閣よりも上位機関である。それにより朝鮮労働党のトップである金正恩総書記が北朝鮮の最高指導者となる。政治、社会、経済、文化、すべての分野において白頭（正日の出身地とされる山の名前）の血統がいかに偉大であるかというプロパガンダを徹底する。

この国の国民は、左胸に故金日成主席・故金正日総書記の肖像画が描かれた赤いバッチをつけている。これは朝鮮民主主義人民共和国一員としての証である。一方でバッチを身に着ける前の小中学生が身に着けるのは赤いスカーフだ。これは小学校二年生から身に付けられるという。しかし、みんなが手に入れられるわけではなく、「革命の後継者」としての資質を問われ、“優秀”な順にこのスカーフが渡される。<sup>18</sup>「いかに国のために役立つ存在になれるか」この国ではそのような競争が7歳から始まっているのである。

北朝鮮は1990年代に入って「苦難の行軍」と呼ばれる大飢餓に見舞われた。この大飢餓でおよ

---

<sup>16</sup> 資本、資源がほとんどない状況から急速に経済成長を遂げた。

<sup>17</sup> サムスングループ・現代自動車・SKグループ・LGグループ・ロッテグループ・現代重工業・GSグループ・韓進グループ・ハンファグループ・斗山グループ

<sup>18</sup> TRANSIT42号 「韓国・北朝鮮 近くて遠い国へ」 講談社 MOOK

そ数十万から数百万の国民が餓死したと言われている。それによって社会システムが麻痺し、北朝鮮がそれまで築き上げてきた社会主義が一時崩壊するが、北朝鮮の人々は生き延びるために様々な商売を始めたことにより自然発生的に市場が生まれ北朝鮮全土が市場経済の波に飲み込まれていった。

表 3 は北朝鮮と韓国の基本情報を表したものである。

**表 4 韓国・北朝鮮の基本情報**

	北朝鮮	韓国
人口 (2020 年)	2,577 万 8,816 人	5,178 万 579 人
面積	約 12 万km <sup>2</sup>	約 10 万km <sup>2</sup>
人口密度	211.7 人/km <sup>2</sup>	509.2 人/km <sup>2</sup>
宗教	仏教徒連盟、キリスト教徒連盟等の団体があるとされるが、信者数等は不明。	宗教人口は全体の 52.1% (内訳は仏教：42.9%、プロテスタント：34.5%、カトリック：20.6%、その他：2.0%)
政体/国家元首	共和制/金正恩総書記	民主共和国/文在寅大統領
通貨	朝鮮民主主義人民共和国ウォン	韓国ウォン

[出典]韓国統計庁「KOSIS」、外務省

## 第六章 韓国と北朝鮮の「これから」

韓国と北朝鮮。すでに全く異なった思想、国が設立して70年以上たった今、この二つの国の平和的統一が実現される日は来るのだろうか。来るのだとすればそれはいつになるのだろうか。

韓国・北朝鮮のように一つの民族が分断国家となり苦しんだドイツでは、1989年にベルリンの壁が崩壊し、翌年には東西が統一を達成した。東西ドイツに続いて東欧諸国が民主化し、さらにソビエト連邦が解体するなど、東西冷戦は完全に終結し、自由主義と共産主義の勝敗は明らかに決着がついた。こうした世界の劇的な変化に伴い、韓国・北朝鮮の統一の希望もこれまで以上に高まったであろう。しかし、その一方で朝鮮半島の場合は70年以上にわたる長い分断があまりにも多くの異質性を生んでしまったといった考え方や、武力による戦争をしてしまったためドイツとは事情が全く違うといった悲観論も存在した。

もちろん今日に至るまでに南北統一に向けた試みは何度も行われてきた。金大中、盧武鉉政権期の「太陽政策」、「平和繁栄政策」で両国が飛躍的な発展を遂げると共に、軍事境界線では鉄道連結や南北経済協力の一環としての工業団地建設などが進行した。また2018年4月27日に南北首脳により「板門店宣言」が発表された。正式名称は、「朝鮮半島の平和と繁栄、統一のための板門店宣言」である。この宣言の内容には、「非核化を共同目的とする」「朝鮮戦争の2018年内の終了を目指す」などがあり、ここでも大きく情勢が動き始めていた。さらに、2018年9月18日から20日まで行われた「平壤共同宣言」では「南北の武力衝突の防止」「南北間の鉄道・道路建設を2018年内に着手」「離散家族面会所の開設」などの表明があった。しかし、この幾度なく行われてきた試みも国際状況や政権が変わるたびに白紙に戻り、今現在まで関係は変わらず停滞が続いている。このことは政権の正統性を掲げて長い間張り合ってきた南北の統一は非常に難しい問題であることを表している。むしろ、統一の可能性がでてきたとしても、その分主導権を求めての駆け引きが行われることは間違いないだろう。また、限られた資源の中で両国が共に経済を維持し発展させるためには数多くの分野で考慮が必要になる。

ここで再び両国のこれまでの経済の状況を整理してみると、韓国は過去70年間の間に驚くべき経済発展を遂げてきた。天然資源の大きな変化もなく約10 km<sup>2</sup>という国土に約5178万人の人口を抱えながら、2009年には世界第13位の経済規模に達した。貧困から富裕へ奇跡の変革を遂げたのは、南に導入された個人への報酬を前提とした経済システムによるところが大きいだろう。一方で北朝鮮では食物等の生活必需品不足が深刻化し、国民が苦しむ中、核兵器を備えその膨大な軍事目的支出が経済問題へと繋がっていった。<sup>19</sup>この両国の全く異なった経済方針や第五章で述べた韓国と北朝鮮の今の様子からもわかるように南北間で経済規模や軍事力における格差、そして国民の考え方が大きく異なっている。

---

<sup>19</sup> 高麗大学名誉教授 黄義珪「非武装地帯と分断された南北朝鮮の運命」(国際東アジア研究センター紀要 2010年9月)

韓国で行われた南北統一に対する世論調査では「南北統一は可能か」という設問に対して2000年度に可能であると答えた人は70%であることがわかった。しかし、その一方で7年後の2007年には51.6%と約20%も大幅に減少がみられたという結果がある。<sup>20</sup>この韓国世論の否定的な動向として考えられるのは「北朝鮮の核開発問題」をめぐる世界各国からの国際的批判である。こういった問題が起こるたびに国民の考え方も互いに大きく異なっていくだろう。かつて1つの国、そして同じ民族として生活を共にしていた朝鮮半島の人々は、70年もの間民間同士の直接的な交流が全くと言っていいほど行われていない。両国民が互いに情報を得るもののほとんどがメディアである。特に北朝鮮は閉鎖的な社会で、今もなお韓国製品は禁止されており、販売も所有も認められていない。そのため北朝鮮国民にとって一部のメディアの情報がすべてであるともいえる。メディアが流す情報は自国にとって有利になるものが多いため、その一部の情報で互いの国のイメージが良くも悪くも形成されてしまう。

他国のイメージ形成におけるものに関しては、かつての日本と韓国を例にして考えることができる。長い間日本の植民地にあった韓国は独立後、映画や音楽、漫画等のいわゆる日本の大衆文化を規制してきた。この頃は互いに憎み、軽蔑することが多かったであろう。しかし、1998年10月に金大中大統領が日本大衆文化の段階的開放措置を宣言し、映画や音楽等日韓の文化の相互流入が増えた。これにより日韓で人の行き来が頻繁に行われ、直接的に若者の文化交流が多くなり、過去からのお互いの国や人のイメージを大きく変えた。ここで「民間同士の交流」がいかに大事なものであるかがわかる。

過去、そしてここ最近の北朝鮮の政治体制を考えると、一党独裁制が存在する限り「統一」は現実的には難しいと言えるだろう。だが、北と南の和解のために大きく貢献した金大中政権のような政権が再び訪れれば両国和解の第一歩として「民間同士の交流」（国の行き来を可能にすること）が進展することに希望を抱いてもいいのではないだろうか。

私が国交においてこの「民間交流」の大切さを改めて考えるきっかけとなったある人物の言葉が非常に印象的であったので紹介したい。それは序論で紹介した板門店から軍事境界線を踏み超え、韓国に脱北した北朝鮮兵士の言葉である。彼は2019年に日本のテレビ局に対してインタビューに応じている。彼はそこで「北朝鮮と韓国を自由に行き来できるようになるなら、私は人生の全てを捧げてでも南北統一を成し遂げる仕事したい」と答えた<sup>21</sup>。南北問題において彼の言葉ほど影響力の持つ言葉はあるだろうか。彼は命を懸けて南北の境界線を渡ったが、それは決して軽い決断ではなかっただろう。私はその彼の決断がいつか南北問題を動かす大きな力となり、彼が先陣を切って渡ったその境界線を誰もが気軽に安全に渡れるようになることを強く願う。そして実際に自分の目と肌で感じたあの南北を繋ぐ都羅山駅が、南と北の人で活気溢れる駅になることを期待したい。

---

<sup>20</sup>李相睦「韓国の南北統一に関する一考察」（愛知学泉大学現代マネジメント学部紀要 第3巻 第2号 2015年）

<sup>21</sup>FNN プライムオンライン「あの板門店での凄絶 銃撃「脱北兵」が初めて語った“脱北理由”と“現在”」（2019年4月18日）<https://www.fnn.jp/articles/-/1710?display=full>

## 参考文献

### 論文（著者名五十音順）

1. 高吉嬉「朝鮮半島の分断と統一問題をめぐる日韓相互認識の隔たり：日韓の教育的地平の統一のための基礎作業」（東京大学大学院教育学研究科紀要 第37巻 1997年12月）
2. 金恵玉「韓国における平和教育の現状と課題」（立命館産業社会論集 第44巻 第4号 2009年）
3. 黄義珏「非武装地帯と分断された南北朝鮮の運命」（国際東アジア研究センター紀要 第21巻 3号 2010年9月）
4. 佐々木正徳, 大宅美里「安保とツーリズム-韓国の軍事国家とダークツーリズム-」（長崎外大論叢 第19号 2015年）
5. 徐賢燮「韓国における日本文化の流入制限と開放」（長崎県立大学 研究紀要 第13号 2013年）
6. 李相睦「韓国の南北統一に関する一考察」（愛知学泉大学現代マネジメント学部紀要 第3巻 第2号 2015年）
7. 李良姫, 福原裕二「韓国における民族分断と観光」（北東アジア研究 第17巻 2009年）
8. 崔吉城「朝鮮半島の南北分断と「敵対双方」の観光化」（アジア社会文化研究 第1号 2000年）

### 書籍（著者名五十音順）

1. 石坂浩一, 福島みのり『現代韓国を知るための60章 【第2版】』（明石書店 2016年）
2. 小田川興『38度線・非武装地帯を歩く』（高文研 2008年）
3. カン・スンウォン「同年代の仲裁（平和教育を開く）」（コミュニティ 2007年5月 pp.16-17）
4. ブルース・カミングス(鄭敬謨、林哲訳)『朝鮮半島の起源 第1巻 解放と南北分断体制の出現 1945年-1947年』（シアレヒム社 影書房 1989年）
5. ブルース・カミングス(鄭敬謨、加地永都子訳)『朝鮮戦争の起源 第2巻 解放と南北分断体制の出現 1945年-1947年』（シアレヒム社 影書房 1991年）
6. 木村正史『国際政治のなかの韓国現代史』（山川出版社 2012年）
7. 菊池正人『板門店 ~統一への対話と対決~』（中公新書 1962年）
8. 饗庭孝典『朝鮮戦争~分断 38度線の真実を追う~』（日本放送出版協会 1990年）
9. ビル・シン『38度線はいつ開く ~ビル・シンの朝鮮戦争~』（サイマル出版会 1993年）
10. 李良姫『民族分断と観光 ~金剛山観光から見る韓国と北朝鮮関係~』（溪水社 2018年）

### 雑誌

1. TRANSIT42号「韓国・北朝鮮 近くて遠い国へ」（講談社 2018年）

### その他

1. FNN プライムオンライン「あの板門店での凄絶 銃撃「脱北兵」が初めて語った“脱北理由”と“現在”」（2019年4月18日）<https://www.fnn.jp/articles/-/1710?display=full>